

憧れの先輩教師その2

2020.9.4

私の実家は果樹園を営んでおり梨を栽培している。いつの頃からかは忘れてしまったが、憧れの先輩教師に実家の梨を送るようになった。すると、その先生からは、毎年丁寧なお手紙と何冊かの書籍が返ってくる。私は、その文面により、襟を正し、思いを新たにすることになるのである。

憧れの先輩は、こういった本を読んでいるのかと思いながら、送られてきた本を毎年読ませていただいている。職場は離ればなれになっても、いまだに影響を与えていただいているわけである。

みなさんの職場にも、憧れの先輩はいらっしゃるだろうか。あるいは、みなさんが、どなたかの前途有望な若手にとっての憧れの存在となっているだろうか。「ぜひ〇〇さんのようになりたい」と思っただけのことが理想ではあるが、少なくとも「〇〇さんのああいうところは見習いたい」という存在でありたいと思う。

どの職場にも“文化”のようなものがあると思う。文化は受け継がれていくものである。職人さんの世界が一番わかりやすいだろうと思う。伝承の方法は、いろいろあると思うが、受け継がれていかなければ、職人の世界は成り立たなくなるだろう。

基本的には、教師文化も同じはずである。ところが、教員の世界では、この文化の伝承が危うくなっている。OJTという言葉がある。このような言葉が、教員の世界でも使われ出したことが、文化の伝承が危うくなっていることの裏返しである。わざわざOJTという言葉を使う必要があるほど、伝承が難しくなっているのかもしれない。

要因は、いくつか考えられる。教員一人一人が忙しすぎる。先輩が後輩にゆっくりと教える時間がない。後輩も忙しそうな先輩には声をかけづらい。先輩が後輩に教えることを躊躇してしまう。「こんなことを言ったら嫌がられるのではないか」などと考えてしまう。先輩が、やたらと後輩に気を使っているのである。

時代が変わったとか、世の中の風潮というのは簡単である。だが、それでは若手である後輩たちのためにはならないのではないか。生徒も同じだが、吸収しようとしていない人に何かを教えるのは困難さを伴う。

理想は、“啐啄同時（そったくどうじ）”である。啐啄同時とは、鳥の雛が卵から出ようと鳴く声と母鳥が外から殻をつつくのが同時であるという意味である。そこから、またとない好機のこと。学ぼうとする者と教え導く者の息が合って、相通じることとして使われる。

後輩である若手が、学ぼうとするスイッチを入れなければ、何も始まらない。スイッチがあればまだいいが、スイッチそのものがない若手もいるかもしれない。今こそ、現代だからこそ、文化の伝承が必要とされるはずである。だが、なかなか人材の育成は容易ではない。先輩の立場の者が、かなりの修練を積んでいないとむずかしい。だからこそ、果敢に挑むか、あるいは諦めるか。

これからの若い人たちには、ぜひ憧れの先輩といえる存在をもってほしい。私に特別な吸収力があつたとは思わないが、数々の先輩方から教え導かれたことは多い。それが今の自分をつくっているのは確かである。